

## 西山政権下におけるパリ外国宣教会西トンキン代牧区

——一七八八—一八〇二——

### 牧野元紀

はじめに

阮朝<sup>(1)</sup>の創始者、阮福暎は一八〇二年に西山政権<sup>(2)</sup>を打倒し、ベトナム全土の統一を果たした(「一統」<sup>(3)</sup>)。一八世紀末から足掛け三十年におよぶ西山との戦いにおいて、彼は「パリ外国宣教会 La Société des Missions Étrangères de Paris (以下、MEPと略称)<sup>(4)</sup>」のフランス人宣教師でコーチシナ代牧区代牧司教<sup>(5)</sup>の任にあったピニョード・ペーヌ Pigneau de Behaine と親交を結び、キリスト教勢力を含む国内外の「反西山」の諸勢力から軍事的・経済的支援を得た。

「一統」におけるピニョーの働きがクローズアップされることから、ベトナム国内のキリスト教勢力は一貫して「反西山」勢力の一翼として従来とらえられてきた。また西山政権治下におけるキリスト教の宣教活動は戦乱と弾



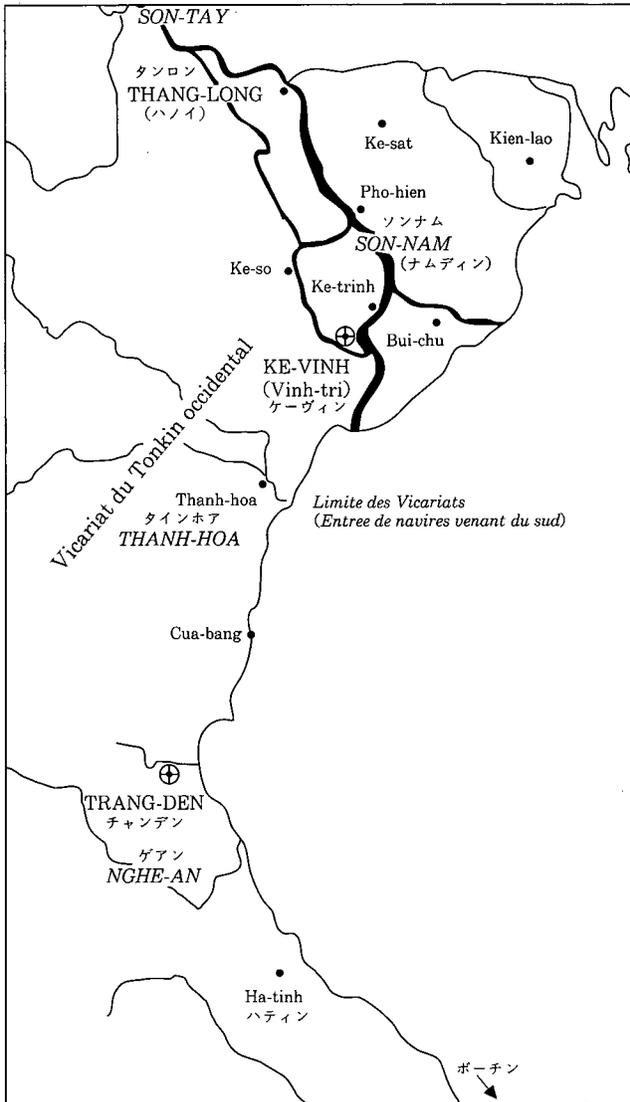


図2 「西トンキン代牧区」

A. FOREST

Les Missionnaires Français au Tonkin et Siam (XVII<sup>ème</sup>-XVIII<sup>ème</sup> siècles) LIVRE II. Histoires du Tonkin p. 172 より引用一部修整

圧に晒され、停滞を余儀なくされたと一般に考えられている。たとえばメイボン Maybon は「無政府状態による全国的な混乱で宣教事業の発展にはまったく好ましくない状況であった」と概括する。ローネイ Launay やファン Phan<sup>(8)</sup> に代表されるベトナム・キリスト教布教史における主要な先行研究においても西山期のキリスト教社会の活動は低調であったとの認識が均しくもたれている。

しかしこれらの研究は、何れもがピニョーの管轄地であり、阮福映の本拠地であるベトナム南部（コーチシナ）について触れるにとどまり、同時期のベトナム北部（トンキン）に対する関心は総じて低いといった問題点を抱えている。<sup>(9)</sup> ここでは先行研究の見解が無批判に継承された結果、MEP の支持した阮福映の「正統性」を強調するあまり、逆に「迫害者」としての西山のイメージが増幅されたともいえよう。一次資料に基づいた実証的な研究はほとんどなされていない。

幸いなことに一九九〇年代以降、MEP はその所蔵文書の一部を一般に公開しはじめている。これをうけてベトナムのキリスト教社会についての歴史研究は今日にわかに進展の兆しがみえる。<sup>(10)</sup> 筆者もここ数年、フランスにおいて収集した MEP の宣教師書簡文書を利用することによって、一八世紀末から一九世紀後半にかけての北部ベトナムのキリスト教コミュニティの政治・社会史研究を進めている。本稿においては公開されている MEP 文書のうち、「西トンキン代牧区 Vicariat du Tonkin Occidental」関係ファイルとして分類されているもののうち、主に一八世紀末の宣教師による書簡が収められる第六九二巻から第七〇二巻までの手稿文書を用いた。<sup>(11)</sup>

本稿においては西山政権期の北部ベトナムのキリスト教社会の実体を明らかにすることによって、キリスト教弾圧者として固定的なイメージのなされる西山像に再検討を加えようとするものである。そうした作業をつうじ、キリスト教コミュニティが、むしろこの時期に形成され、一九世紀を通して北部ベトナムにおいて勢力を伸張させて

いく基盤を作っていたことが明らかとなるだろう。

## 第一章 西山政権以前における西トンキン代牧区の概況

### ——紅河デルタとゲアン——

西トンキン代牧区においては一七世紀中葉より、MEPがローマ教皇から任命を受けた代牧司教の下で独占的に宣敎事業を行なってきた。地理的には現在のベトナムでいえば、紅河の西半分の地域とザインGanh川より北部の地域に相当する。大まかに言えば西北部の山岳地域を後背地として、北は紅河デルタの西半分と、南はタインホアThanh Hoa、ゲアンNghe Anの兩地方を含み、コーチシナとの境を接するボーチンBo Chinhまでの地域である。代牧区は各管区districtに下位分割されていたが、<sup>(12)</sup>中核となるのは紅河デルタ(ナムディン地域が中心)とゲアン(ハティンとボーチン地域を含む)の二地方である。なお、西北山岳地域への布教が本格化するの是一九世紀後半であり、本稿において「キリスト教徒」とは、特別な言及をしないう限り、平野部のマジヨリテイであるベトナム人キン族のカトリック信者を指す。

紅河デルタでは山南下鎮(現在のナムディン省)に属するクレティアンテchréanté(キリスト教集落の末端単位)であるケーヴィンKe Vinhに歴代のMEP代牧司教が居住し、西トンキン代牧区全体の中心地として機能した。また司祭やカテキスタ(公教要理教師)など現地人の聖職者を養成するコレージュとセミナーがそれぞれ設置されていた。生業においてキリスト教徒の住民は一般の非キリスト教徒の周辺住民と目立った相違はなく、大部分が稲作を中心とする農業に従事していた。ケーヴィンをはじめとするキリスト教徒のみから構成される「純粹ク

レティアンテ *chréiente pure*」は紅河デルタにおいては少数存在するのみで、村落形態としては非キリスト教徒との混住村落が圧倒的に多かった。

一般にベトナムの伝統的な村落では村落内構成員の団結と序列を象徴する様々な儀礼があるが、村落内に居住するキリスト教徒は「迷信的」とされる儒教あるいは民俗宗教の要素を含む祭礼への参加を拒絶したので、他の住民との衝突がしばしば生じた。訴訟が起こされることもあったが、通常はキリスト教徒による祭礼費用の応分負担もしくはそれ以上の金銭の上納によって対立は回避された。また納税や兵役などの国家への負担義務については一般住民と区別がなく共同で割当にに応じていた。混住村落において、キリスト教徒と一般住民は敵対と協調をはらんだ関係のなかで互いの生活を営んでいたと考えられる。

一方、南のゲアン（もしくはポーチン）にも中心が置かれ、通常は協働司教 *coadjuteur* や総代理 *provinciaire* など代牧区内の宣教師指導部の次席級が管轄し、ケーヴィンに比べ小規模ではあったが、コレージュも設置されていた。<sup>(13)</sup> 元来、気候的には稲作に向かない地域であったため、<sup>(14)</sup> 紅河デルタに比べると、農業従事者の割合は相対的に低かった。農業を行ないながらも、綿などの商品作物や塩田で生産された塩、魚醬、あるいは藤曼などの山地産品などを紅河デルタへ運び、交易を行なうなど、舟運による商業で生計を立てる者が少なくなかった。<sup>(15)</sup> 沿海部では漁業が盛んであり、宣教師の書簡にもキリスト教を信仰する漁民がかなり多く確認される。<sup>(16)</sup> つまりゲアンにおいて商人とは一般に農業か漁業を兼業しているか、三者が結合した形態をとるのが特徴であった。<sup>(17)</sup> また男性に限れば、徴兵によって出身地を離れる者が紅河デルタ地域に比べて相対的に多い。その精鋭こそが、黎朝後期における鄭氏政権の軍勢力を支えた、いわゆる「清又優兵」である。<sup>(18)</sup> 彼らは、漁民や商人など「移動」を日常とする者たちと同様に、頻発する争乱など社会不安のなかで常に生命の危険にさらされていた。兵士の残された家族（女性・子供・老

人)もまた不安定な生活環境下に置かれた。

フォレスト氏はこうした「イティネラン itinerant (やすらい)」の人々が、權威型で安定志向の儒教ではなく、儒教からは異端とされたキリスト教や仏教、あるいは在地の民間信仰に傾いたことを指摘しており、ゲアンでは一八世紀以降に始まる儒教復興の流れに沿った儒者エリート村の形成とほぼ同時並行的に、キリスト教徒のみからなる純粹型村落の形成が、紅河デルタの地域に比して進んでいたとする<sup>(19)</sup>。純粹クレティアンテでは、混住村落でみられるような儀礼を巡る「異教徒(非キリスト教徒)」との対立は滅多に生じることがなく、住み分けがほぼ完全に図られていた。ゲアンにおける儒者あるいはキリスト者による双方の「歴史的」な村落形成の強固な伝統は、一九世紀以降のベトナム近代史において、官界とキリスト教界双方における知識人・指導者層にゲアンの村落出身者が少なくないことからもうかがい知ることができる。

ナムディンとゲアンのこの二つの布教中心地は鄭氏政権下のキリスト教弾圧において、互いに双方の避難場所としての機能を持ち合わせていた。しかし、どちらかといえば弾圧を受ける頻度が高く、被害が大きいのは通常、ナムディン地方であった。これは首都であるタンロン Thang Long (ハノイ)に近いことが主な理由である。逆にゲアンは地理的に首都から離れており、中央から相対的に独立した行政・司法権をもつ地方長官である「鎮守 gouverneur」が治めていた<sup>(20)</sup>。そのうえ、鄭氏と対立する広南阮氏(コーチシナ)との前線に近く、清又優兵を中心とする軍事動員の要地であったこと等の理由から、キリスト教についても鎮守の独自権限が行使され、中央とはしばしば異なる政策がとられた。

紅河デルタで広域的な弾圧が行なわれている時に、ゲアンでは鎮守をはじめとする在地の高官、とくに高級武官によるキリスト教の庇護がしばしばなされた。これは当地在任時のみならず中央政権における軍事的勢力基盤の確

保、すなわちキリスト教徒のゲアン出身兵士の支持による自身の勢力維持・拡大をにらんだ処置とされる。<sup>(21)</sup>しかし、その一方で禁教令をおしたハノイの中央集権政策に反発する、ゲアンの地方官の既得権益保護の動き、たとえば行政・司法における独自の裁量権の誇示とも考えられる。宣教師の書簡史料にはキリスト教を「積極的に」保護したゲアン鎮守が多々確認される。ここに実例を若干掲げてみる。

古くはMEPによる宣教開始以前の1629年、イエズス会のアレクサンドル・ド・ロード Alexandre de Rhodes<sup>(22)</sup>らがトンキンからの強制退去を命じられるが、コーチシナへ向かう途中、鄭主の弟であるゲアン鎮守から厚遇を受けている。また禁教令のさなか、1694年にはMEP現地人司祭のリー<sup>(23)</sup>がキリスト教徒のゲアン鎮守とその妻の助力を得て追跡を免れた。さらに鄭桐政権下のキリスト教弾圧において難を逃れるために、ナムディン在住の代牧司教ベロ Brody<sup>(24)</sup>は1713年から1723年の十年間、ゲアン鎮守の保護を得ることによって、本拠を当地方のチャンデンに移している。

フォレスト氏によれば、自閉的で内向的な性格をもつ鄭森政権下で中央権力が瓦解し始めた1730年代以降において、ゲアンとタインホアは完全に鎮守の権力下に置かれ、小独立国家の様相をみせはじめたという。<sup>(25)</sup>たとえば一七六四年、ゲアンではキリスト教を迫害したという三人の高官が、当地の鎮守の命令によってほぼ同時に罷免され処罰を受けている。この鎮守は各村落の村役人に対してもキリスト教徒への迫害を含めて、治安を乱す行為を厳しく禁じる法令を出した。<sup>(26)</sup>また一七七三年から一七七八年の間、红河デルタ地帯においては、大弾圧が行なわれたが、ゲアンでは通常通りの宣教活動が行われ、宣教師の多くが避難先を求めたとされる。<sup>(27)</sup>

一七七七年に鄭氏政権内における有力な武官の一人であった黄素履（黄廷宝）がゲアン鎮守に任命される。黄素履はキリスト教の庇護者であり、一七七九年以降、彼がタンロンに戻り、政権内で実権を握るようになるとナムデ

インでもキリスト教徒の官人が長官となり、キリスト教への弾圧は終息する<sup>(28)</sup>。同時期、ゲアンでは鎮守の母親が死の直前に洗礼を受け、その葬礼も鎮守の臨席の下で盛大に執り行われることが企画された。この鎮守もやはり、非キリスト教徒によって頻繁に行なわれていた金銭収奪を目的とするキリスト教徒に対する訴追を却下したり、悪質な訴追者に対しては罰則を設けて逆訴追を行ったりするなど、終始キリスト教を保護したとされる<sup>(30)</sup>。

ゲアンにおける地方政治権力によるキリスト教保護の伝統の背景には、鎮守をはじめとする在地地方権力が中央の国家権力の浸透（ここではキリスト教弾圧政策）に対して行政・司法における独自の権益を保持するねらいがあった。またこのような独自の裁量権の誇示と治安の安定により、軍・民において在地での威光と支持の獲得が企図された。一方で教会側もこのような分権的な政治体制を十分把握しており、それを巧みに活用することによって教勢を伸ばした。はたして西山政権下においても、両者のこの共生的な構造は見られるのだろうか。

## 第二章 光中帝治世期（一七八八—一七九二）

### 第一節 光中帝とキリスト教

黎明末期の政治・社会の混乱のなかでベトナム全土の統一に成功した西山三兄弟のうちトンキンの実権を掌握した阮恵は黎明を廢し、一七八八年に光中帝を自称した。彼は清朝の遠征軍を撃退したが、ついには「安南国王」として乾隆帝より冊封を受けるにいたった。その勢力範囲はトンキン全土からコーシナ北中部に及び、首府は富春（フエ）に置かれた。

光中帝治世下のトンキンにおいてキリスト教に対する目立った迫害は宣教師書簡の中ほとんど確認されない。

新たな支配地域としてトンキンを含むことになった光中帝の政權中枢において、キリスト教徒あるいはキリスト教シンパの官人による影響力が行使されたとみられる。宣教師ラ・モット La Motte<sup>(31)</sup>は以下のように述べている。

官人や兵士のなかにもキリスト教に関心を持つ者が増え始めており、有能な大臣の下で盗賊も厳しく取り締まられ、キリスト教は鄭氏の王たちの時代に比べても自由であり、復活祭も盛大に祝うことができた<sup>(32)</sup>

また、同僚の宣教師ラングロワも後に光中帝の治世を顧みて以下のように述懐している。

コーチシナ人がトンキンを占領して以来、その残虐さと暴政にもかかわらず、キリスト教はまったく迫害されなかった。彼らのうちの何人かは、とりわけ高官は、キリスト教に恩恵を与え、これまでのトンキンのほとんどの王の政府よりもよほど自由を享受できた<sup>(33)</sup>

光中帝のキリスト教に対する穏便な姿勢はいかなる理由によるのであろうか。一つは政權の対外政策の転換に求められる。政權が安定化しはじめたこの時期に、光中帝は海賊集団のみに依拠する従来の貿易体制を改めて、ヨーロッパ諸国との提携を模索し始めたのである。

一七九一年初頭、光中帝は寵愛を与えている夫人の病氣治療のためにヨーロッパ人医師を探し求めた。そこで MEP はキリスト教布教の安全を確保するため、光中帝の要請に応える形で、北コーチシナにいた当時最年少の宣教師ジラルール Girard<sup>(34)</sup>を王宮へ派遣し、同年の三月七日から医者として、夫人の看護にあたさせた。この夫人をかつて看護し、治癒させたのがフランシスコ会のヨーロッパ人宣教師であったこと、そして宮廷内にいた光中帝側近の官人がキリスト教徒であったことがその招請の主な理由と当初は考えられていた<sup>(35)</sup>。しかし一方で、光中帝がジラルールを通じてヨーロッパからの軍事援助を引き出そうとしているのではとの見解も宣教師たちの間から出された<sup>(36)</sup>。光中帝は、南部で抗争中の兄の阮岳、ドンナイ(コーチシナ南部)の阮福暎、黎朝一族が潜伏する中国(清朝)との

對抗からヨーロッパ勢力との接近を図ったのであろう。

事実、光中帝の依頼を受けたジラルルはマカオにおいて、ドンナイで阮福暎との通商に失敗したポルトガル籍のマカオ船とスペイン籍のマニラ船から十万里ーヴル<sup>(37)</sup>の硫黄を入手すべく同船と折衝を行っていた<sup>(38)</sup>。しかし光中帝政府とヨーロッパ勢力とのその後の交渉は頓挫する。そもそもポルトガルのマカオ総督は西山とはいかなる交渉ももたない方針をとっていた<sup>(39)</sup>。一方西山の側でも光中帝の突然の死によって、政権内での権力闘争が生じることとなり、政策の継続性が絶たれることとなった。一七九三年に亡き光中帝の許可状をもったヨーロッパ船がトゥーロン<sup>(40)</sup>Touron(ダナン)港に入港するものの、事情を解さない光中帝の遺児の軍船に追い払われるという事件が起きている。これは光中帝死後の西山政権が皇帝を中心とした確固たる意思統一のシステムを有しておらず、体制基盤の脆弱性を端的に示した一例といえる。

しかし、光中帝を含めて初期の西山政権中枢において、キリスト教は対外政策上、保護の対象となりえても、弾圧の対象とはみなされなかったことがここでは確かめられる。

## 第二節 トンキン宣教団の反応——「黎朝昭統帝」の出現？——

光中帝がたとえ「善政」を布き、キリスト教に「好意的」であったとしても、教会側から「暴君<sup>(41)</sup>tyran」と呼ばれつづけたのは、コーチシナ代牧司教ビニョーによるイニシアティブが発揮されたためである。その結果、MEPは総意として、阮福暎のみを唯一の「正統なlegitime」王と認めざるをえなかったのである。しかしながら、トンキンのMEP宣教団はこの時期、阮福暎軍がコーチシナ南部で西山勢力と一進一退を繰り返す低調な戦況に鑑みて、阮福暎による統一事業の実現性そのものに疑念をもち始めていた<sup>(42)</sup>。そのうえ、たとえチュア<sup>(43)</sup>chuaの称号を有

していたとはいえ、コーチシナ人である阮福暎に対するトンキン人一般の衆望は未だ熟していなかった。

一七九〇年の春先、山岳地域に近い教区の現地人司祭フィン Huynh の下で黎朝紹統帝を名乗る若者が暮らしているとの噂が広まる。<sup>(43)</sup> 黎朝王権の篡奪者である西山政権の光中帝に対する異議申し立てと、さらには阮福暎を含む新来のコーチシナ人の勢力に対するトンキンの優越性の根拠を模索していたトンキン宣教師団にとって、この若者の出現はまさに時宜を得ていた。とくに宣教師ラ・モットは黎朝復興の熱心な支持者であったとみられる。彼は阮福暎を指して「トンキンおよびコーチシナの最高官人であるが皇室の者ではない」と明言し、阮福暎の即位後にキリスト教が必ずしも安泰である保証はないことを予見する。<sup>(45)</sup> また、「阮福暎によってこの黎朝紹統帝を復位させ、黎朝統治のもとで信教の自由を獲得すべき」との見解さえ示している。<sup>(46)</sup> この紹統帝擁立の構想は若者の素性が明らかとなり、まもなく頓挫するが、黎朝復興運動は阮朝成立後も一九世紀をつうじてトンキンにおける反政府運動の主要な軸を形成する。一般に、トンキンにおける黎朝復興運動はトンキン人のコーチシナ人に対する反発と警戒の現れであるが、MEP内部においては、布教伝統の蓄積を誇る西トンキン代牧区の宣教師団が、ピニョーの下でベトナム宣教の主導権を握ったコーチシナ代牧区に対する優越性を主張する意味合いを含んでいた。

ジラールが光中帝からの働きかけに応じ、ラ・モットが黎朝紹統帝の擁立の可能性を模索したという事実からは、西山勢力下におかれたトンキンと北コーチシナのMEP宣教師達が、ピニョーの主導で進められたドンナイの阮福暎との提携について、必ずしも完全な同意を与えていなかったことが読み取れる。

### 第三章 ロンジュエ司教による改革と禁教令（一七九二—一七九七）

## 第一節 ロンジェの司教就任と主な活動（一七九二—一七九五）

宣教師ロンジェ Longer は一七七六年にフランスよりマカオ経由でコーチシナ代牧区に派遣された。その後、北コーチシナのクアンチ Quang Tri 地方を中心とした地域で十四年の宣教活動を行なった。しかし、そもそもはトンキンに派遣予定の宣教師であったということ<sup>(48)</sup>、一七八九年に西トンキン代牧区では代牧司教のダヴースト Davoust はじめ三人の宣教師が相次いで死亡したために宣教師の不足を補う必要があった等の理由により一七九〇年にトンキンへ転出となった。同年十二月にはロンジェを司教に叙する教書がローマより届く<sup>(49)</sup>。一七九一年七月十三日、ロンジェは司教叙階を受けるため、陸路にてマカオに到着し、翌年九月三十日にマカオ司教により聖別を受けた<sup>(50)</sup>。

一七九三年二月中旬、彼は光中帝の要請によりマカオで商務に当たっていたジラール、そしてフランスから到着したばかりのランゲロワ、ジャロ Jarot を伴い<sup>(51)</sup>、マカオを出港し、トンキンには三月七日に到着する。西トンキン代牧区ではこの時点で総勢十人の宣教師が集結し<sup>(52)</sup>、同代牧区史上最大の宣教師数を数えることとなった<sup>(53)</sup>。三日後の十日にはスペイン・ドミニコ会の宣教師アロンソ Alonzo を東トンキン代牧司教として聖別し、四月には現地人司祭十名を叙階し、現地人聖職者の不足を補った<sup>(54)</sup>。さらに九月二十一日にはゲアンと北コーチシナに隣接するポーチンでラ・バルテット La Bartette をコーチシナ代牧区のピニョーの協働司教として叙階し<sup>(55)</sup>、代牧区内の管区整備にも力を注いだ。当時、ポーチンには九千人の信者が居住していたが、代牧司教未踏の地であり<sup>(56)</sup>、ロンジェによっではじめて本格的な整備が行なわれ、小教区三つと司祭六人が配置された<sup>(57)</sup>。

また一七九三年末から一七九五年の中ごろまでに四万人の信者が居住していたとされるゲアン・ハティン両地方を精力的に巡回し、司教としては三〇四十年ぶりとなる訪問を実現している<sup>(58)</sup>。その間、一七九四年には同地方でキ



代トンキン西教会宣外国パリ

宣教師名	1788	1789	1790	1791	1792
ダヴースト Davoust	†				
ル・ブルトン Le Breton	†				
ド・ディエンヌ De Dienne	+				
ルー Roux	+	†	†		
ティエボー Thiébaud	+	+	†		
セラール Sérard	+	+	+	+	+
ル・ロワ Le Roy	+	+	+	+	+
ラ・モット La Mothe	+	+	+	+	+
エイヨ Eyot	+	+	+	+	+
ロンジェ Longer		+	+	+	+
ゲラール Guérard			+	+	+
テシエ Tessier			+	+	+
ラ・ビサシェール La Bissachère			+	+	+
ルパヴェック Lepavec			+	+	+
ラングロワ Langlois					+
ジラール Girard (コーチシナ)	+	+	+	○	○/+

† 没年    + 在任年    ○ 不在

王 (Vice Roi) が、阮福暎軍を指揮するフランス人オリヴィエ Olivier をみて、フランス人の関与が疑われる同地のキリスト教徒に対して激怒し、迫害を示唆したとの情報が宣教師側に伝わっている。<sup>(61)</sup>

一七九五年一月、禁教令が公布される。斐徳宣は元仏僧であったこともあり、仏教の振興もキリスト教禁令の目的のひとつであった。先述したように仏教はキリスト教と信仰受容層が重なっており、両者は競合関係にあった。この禁教令のなかでは、キリスト教徒の教会を撤去し、代わりに仏教寺院を建築し、キリスト教を貶めることが命令されたという。<sup>(62)</sup>

紅河デルタ地帯 (ハノイ) においては二月二六日に公布され、斐徳宣の意を汲むトンキン副王<sup>(63)</sup>の呉文楚により厳格に執行された。呉文楚は公布にあたりキリスト教に寛容であった故光中帝に対するキリスト教徒の不義理を責めたとされる。<sup>(64)</sup> 宣教師捕縛のために紅河デルタの各地で多くの間諜が放たれた。<sup>(65)</sup> ル・ロワ Le Roy によると、西山政府によるヨーロッパ

パ人宣教師の逮捕命令は、逮捕後に宣教師をドンナイへ向かわせ、オリヴィエラヨーロッパ人が阮福暎に助勢しないように交渉させることを目的としたとい<sup>(66)</sup>う。

一方、この時期、ゲアン・ボーチン地方では、「禁教令に乗じてキリスト教徒を迫害したのは異教徒か小官人のみであり、高官はキリスト教徒に好意的な処置をほどこし、訴訟においても、大抵キリスト教徒側に有利な裁定をした」と同地の宣教師ゲラール Guérard は報告している。<sup>(67)</sup> またラ・モットは、私財を投じて教会を救うために多大な貢献をした西山の一人に洗礼を施したことを伝える。<sup>(68)</sup> さらに八月にはラ・ビサシエール La Bissachère がキリスト教徒ではないがキリスト教に高い評価を与えたという現地高官の庇護を受け、官人らの臨席のもとで大々的なミサを行なっている。この高官は配下の官人たちに、ラ・ビサシエールの宗教行為を妨害し、ミサに参加する婦女子に暴言をはく者は即刻斬首するとの通達を出したとい<sup>(69)</sup>う。ミサには千人の信者の男女が三日間参列し、その三倍の数の非キリスト教徒が見物に訪れ、百五十人の官人も参列している。ラ・ビサシエールはこの機会に官人たちへ訴訟を起こし、弾圧中に没収された教会を取り戻すことに成功し、<sup>(69)</sup> 荘厳なミサの光景をみせることにより、非キリスト教徒を魅了し、説教に耳を傾けさせることができた<sup>(70)</sup>と述べている。

西山政権の権力行使が禁教令をとおして、フエとハノイでは機能するが、ゲアンでは機能しなかった事実は、黎朝鄭氏政権以来の伝統、すなわち中央の政策執行が在地権力者（鎮守・副王）の独自権限に委ねられるというゲアンの地域的特性が、ここでもなお存続していたことを推測させる。ラ・ビサシエール主宰の盛大なミサが成功した要因は、直接的には彼自身の積極的な宣教活動とロンジエ司教の指導力に求められるが、やはりゲアンを治めた地方長官の庇護に負うところが大きい。

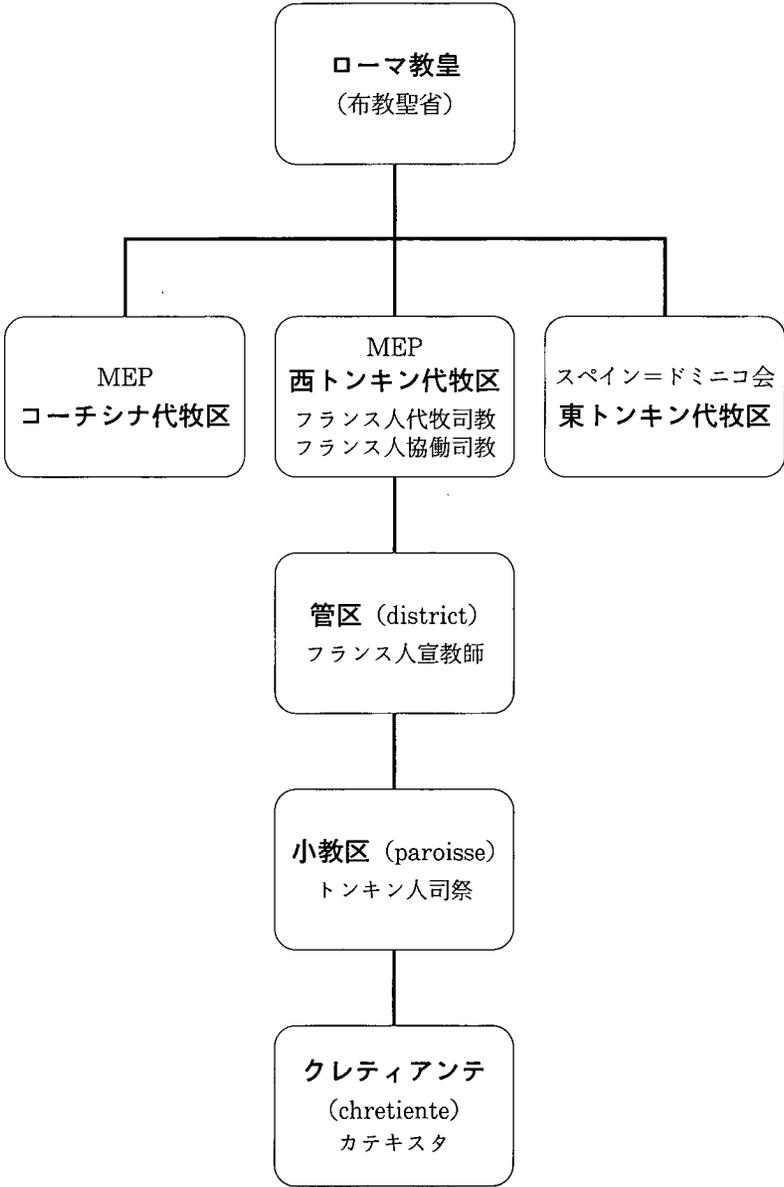
禁教令公布の三ヵ月後に再び政変が生じる。裴徳宣・呉文楚による新王の暗殺計画が、政権内で対立する元トン

キン副王<sup>(71)</sup>の武文勇・陳文紀のグループによって暴露される。裴徳宣は処刑<sup>(72)</sup>され、西トンキン代牧区内には平穩が戻る。一七九五年のこの禁教令は各地で宣教師の避難や金銭目的の信者の略取誘拐などをもたらしたが、執行期間が短く、政権内で主導権を奪い返した武文勇らがキリスト教に対して再び穩健な政策をとったために、代牧区内における実質的な被害はさほど拡大することはなく、キリスト教コミュニティは変わらぬ勢力を保つことができた。

### 第三節 教区會議の開催（一七九五）

一七九五年十月、教区會議 synode が開催された。禁教令によって混乱が生じた代牧区の速やかな建て直しを図るとともに、光中帝以降の西山政権下における宗教活動の自由により弛緩しつつあった宣教団内部の引き締めと、司教就任以来宣教の効率性を目指すロンジュの組織体制をフランス人宣教師の間で改めて追認するための會議であった。代牧区宣教師十人中八人の宣教師が出席し、出席者はば全員の賛同を得て、秘跡授与についての細則、宣教師、現地人司祭、カテキスタ、学生らの行動規範の改定がなされた<sup>(73)</sup>。

なかでも重要な取り決めとして、司教の下で各宣教師がそれぞれの管区を受け持ち、管区内の小教区 paroisse を管轄する現地人の教区司祭達を監督する方式が採用された。また、管区内の現地人聖職者養成施設である「神の家 Maison de Dieu<sup>(74)</sup>」の運営や「十字架の愛人 Amantes de la Croix」とよばれる修道女達の施設もそれぞれ所在の管区担当の宣教師が管理責任を負うこととなった。ヨーロッパ人宣教師は日常の布教活動である秘跡授与などでは通常の司祭としての職権を有するが、管区内においては各小教区に居住する現地人の教区付司祭たちを束ねる上長としての位置づけがなされたのである<sup>(75)</sup>。各管区は三つの小教区に分割され、それぞれの長として現地人司祭を配し、宣教師が監督した<sup>(76)</sup>。ここにおいてヨーロッパ人宣教師の現地人司祭に対する優越性が完全に確定することと



代牧区組織図

なり、代牧司教を頂点とする聖職者間における階層制と代牧区内における命令系統が確立した。

またM.E.P.のマカオ管財所に対して個人的な注文と消費が許されることとなり、宣教師一人当たり年間十ピアストルPisetasの支給がなされるようになったことを重要な改革点として指摘しておきたい。<sup>(77)</sup> 個人消費の認可は元来、共有財産制度を経済的基盤としていたトンキンのM.E.P.宣教団史上はじめての試みであった。<sup>(78)</sup> 担当管区において捕縛された信者や聖職者の買戻し(身代金)費用、貧窮者へ非公式な融通など、割り当てられた資金の運用について、現地に居住する宣教師各自の判断に基づいた柔軟な対応がなされることとなった。

#### 第四節 布教活動の再活性化(一七九六—一七九七)

弾圧が終わり、教区会議での決定事項に基づいて、司教のロンジュを含むフランス人宣教師十人による体制が軌道に乗った時期である。各宣教師の管轄地域は一七九五年以前とくに変更はない。代牧区内に宣教師が三人しかいなかった三〇年前(一七六六年)<sup>(79)</sup>と比べると、人手の面では随分改善されたといえる。

それでも、ラ・モットは、「西トンキン代牧区がそれぞれ四千人の信者を抱える三十の管区から成り、それがヨーロッパの小教区と変わらないほど、多忙な仕事にあふれている」と報告している。<sup>(80)</sup> 一七九七年、エイヨEyoも宣教師の不足を訴え、新規の人材補充をM.E.P.本部へ求めている。<sup>(81)</sup> 一七九七年初頭において、ケーヴィンのコレージュでは五十人以上、チャンヌアのコレージュでは三〇人以上のラテン語学生が確認される。<sup>(82)</sup> また、協働司教はゲアンに常駐することとなり、司教を除く他の宣教師は広大な各自の管区の監督を継続した。<sup>(83)</sup> 順調な宣教活動の進展と教勢の拡大がうかがえる。

一七九七年、西山政権下のトンキンは平穏な状況におかれ、ゲラールは「トンキンでは阮福暎のことについて誰

も話をしなくなり、もはやトンキンで目にすることはないだろう<sup>(84)</sup>と述べている。また、ラングロワは西山政権下においてキリスト教がかつてないほどの自由を享受していることに鑑みて、将来の阮福映によるトンキン征服後における状況については未だ不透明であることを以下のように表明している。

支配者の変更がトンキン人にとって有益であるのか、不利益となるのか、まだ予見することはできない。つまるところ、キリスト教が信仰を勝ち得るのかわかることができないのだ。なぜなら、いまの政府はこの件についていえばまったく自由においてくれるし、この表面的な自由によって信者を訪ね、行きたい所ならどこへでも行って秘跡の授与ができる。かつて、ヨーロッパ人の宣教師が道を歩いてクレティアンテに秘跡授与に行くのがどんなに困難で、いつも危険にさらされていたことは知っているとおりである。いまやまったく状況は異なり、ほとんど何の危険も味わうことなく一番小さなクレティアンテですら自由に訪ねることができ、まずもって隠れる必要もない。官人たちはそれを知っているのだが、道中で我々を見かけても、捕らえさせるといふことはしない。キリスト教徒もまったくといってよいくらい不安はなく、迫害を加える者は高官によってさらに厳しく罰されるのである<sup>(85)</sup>。

ラ・モットに至っては、「阮福映がキリスト教を憎んでおり、その勝利後は西山以上の迫害が起こる」との予測を立て<sup>(86)</sup>、西山政権下で享受している信教の自由が、阮福映の侵攻により侵害されるのではないかとの見方を示す<sup>(87)</sup>。政治権力の流動化がみられたこの時期において、信教の自由が確実に保障される目下の西山政権のほうが、先行きの分からない阮福映の政権よりも、むしろ好ましいとする風潮が西トンキン代牧区の宣教師たちにおいて支配的であることがここに確認できる。

#### 第四章 禁教令（一七九八）——原因と経過——

キリスト教徒が阮福暎側と結ぶ反西山の一政治勢力として西山側によって認知されたことが一七九五年における弾圧の一因となった（第三章第二節）。しかし、トンキンにおいてMEP宣教師自身が反西山の政治運動に積極的に与した形跡はほとんど見られない。ピニョーをはじめコーチシナの同僚達が阮福暎の支援に奔走していたのとは対照的である。トンキンにおいて西山打倒の反乱に加わった者たちは一般の信者、あるいはカテキスタなどの下位聖職者に限定される。宣教師や司祭層は反西山運動に直接的な関与をもたなかった。従来の西山政権の寛容なキリスト教政策への評価と、ドンナイの阮福暎の勢力への警戒が、トンキンのMEP宣教師の行動指針に少なからぬ影響を与えていたと考えられる。とはいえ、阮福暎の本格的な北伐開始と軌を一にする散発的な地方反乱において、下位聖職者や一般信者における関与を示唆する報告は時代が下るにつれて増え始める。この結果、西山政権にとってトンキンのキリスト教コミュニティがコーチシナのそれと同様に、反政府勢力として機能しているとの認識が次第に固まり、再度キリスト教弾圧を推進させる政治的与件となった。

一七九七年の春先以降、阮福暎の北伐が本格化し、フエからボーチンに至るまでの地域を一時的に掌握する。西山軍の敗走と西山に仕えた官人の服属が始まったものの、阮福暎軍は兵糧不足とモンスーンが止んだことにより、まもなくサイゴンへ撤退を余儀なくされた。<sup>(88)</sup>この間、コーチシナ北部とボーチン地方一帯における混乱に乗じ、ある「魔術師」<sup>(89)</sup>が王を自称し、反乱を起こしている。そのなかに以前、「神の家」で生活していた若者が数名加わっていたために、宣教師とキリスト教徒が反乱への関与を疑われたという。<sup>(90)</sup>またこの時期、代牧区内に残存する旧イ

エズス会の反抗勢力が、王都の官人に献金をすることで接近を図り、「トンキンのMEP宣教団がコーチシナのフランス軍人オリヴィエらと結託している」との虚偽報告を流した、との情報がロンジェの下へ入っている。<sup>(91)</sup> 宣教師たちの意向とは関わらず、西山政権にとってMEP西トンキン牧区は、この時期すでに御し難い反政府勢力の一翼と位置づけられるに至った。

一七九八年は阮福瑛の長子である景皇子の親征を除いて、阮福暎側から西山への攻勢はとくにみられない。この年、西山は内政において自身の勢力を回復したとされる。<sup>(92)</sup> この安定が結果として、すでに自明の敵対勢力としての認識が固まったキリスト教に対する、西山（阮光纘）政権の弾圧政策の推進条件となった。また重要な点として、政権内部において反キリスト教の官人がイニシアティブを握ったことを挙げなくてはならない。<sup>(93)</sup> なかで、ゲアンに着任したばかりの阮文慎は、これまで同地に赴任した長官とは異なり、西山政権内においても指折りの仇教官人であった。この年、トンキン全土で西山政権下においてかつてない規模での弾圧が始まる。

阮文慎はすでに同年五月に迫害を示唆したとされるが、<sup>(94)</sup> ゲアンで実際に弾圧が開始されたのは八月二十三日である。十二の地方で教会、司祭館、修道女施設がすべて撤去され、教会所有の財産、米、蠟などすべてが略奪を受けたという。宣教師、司祭の追跡が行われ信者多数が拷問にかけられ、神学生二名と学生三名、そして数人の修道女が連行され、十字架の踏みつけや財産の供出が強制され、司祭の居所についての尋問がなされた。神学生のジャン・ゾアット Jean Doat は五ヶ月に及ぶ収監の末、象舎での強制労役十年の宣告がなされた後、拷問により死亡している。他にも多数の信者が拘束され、体の各部位に焼鑊をあてられるなど様々な拷問を受けたという。その他のほとんどの信者は山間部に避難した。ラ・モットは当地のキリスト教徒官人の助けを得て難を逃れ、ラ・ピサシエールは山岳地帯から沖合の小島へと八ヶ月の間、避難生活を余儀なくされた。<sup>(95)</sup>

## 第五章 西山朝の滅亡と阮福暎の勝利（一七九九—一八〇二）

### 第一節 弾圧の終息——紅河デルタ——

一七九九年において、阮福暎軍は帰仁（クイニョン）城の占拠後も依然としてコーチシナ北部における堅固な基盤を築くことが出来ず、ドンナイでも旗下の兵士の逃亡が相次いだ。八月には台風による被害を受け、軍船三百艘を失い、さらに十月にはピニョーが帰仁で死去する。モンズーンが止み、例年のように進軍が滞ると、阮福暎は帰仁に義弟を残して結局、ドンナイへ退却した。

しかし、キリスト教への弾圧は、一七九九年六月までに、ゲアン地方を除いてほとんどの地域で終息している。<sup>(96)</sup>これは西山政権内部において、キリスト教に対する不干渉の立場をとる二將軍（陳光耀と武文勇）が再び主導権を得た結果であった。間諜や非キリスト教徒による脅迫、あるいは金銭獲得のための捕縛や、コレラの流行による社会不安は続いたものの、紅河デルタの各地域では一応の平穏が保たれた。

### 第二節 ゲアン

一方、反キリスト教の高官、阮文慎が行政を掌るゲアン地方では阮福暎軍の到着まで、引き続き弾圧が行なわれた。ラ・モットを匿ったキリスト教徒の官人二名が告発され、斬首されている。さらに、阮福暎の勅許を受けたカテキスタの青年による反乱計画が露見したことにより当地では弾圧が強化された。加担した反乱部隊の十一人が処刑されている。また反乱の報を受け、阮文慎はゲアン地方すべての村落におけるキリスト教徒の名簿の作成を命じ

ている。<sup>(97)</sup>ゲアンでの弾圧は一八〇二年初頭、阮福暎により隣地（富春）が占領されるといったん終息へ向かうが、依然として各地で間諜が放たれ、宣教師の搜索が行われた。<sup>(98)</sup>

しかし、ゲアンにおける禁教政策の徹底を、阮文慎の個人的動機のみを求めることはできない。これまで述べてきたようにゲアンは伝統的に兵力拡充の要地である。例えば一七八九年に、光中帝こと阮恵はゲアンを中都と称し、城塞を築き兵糧の備蓄をさせたとの記事を『大南寔録』において見ることが出来る。<sup>(99)</sup>光中帝は死の直前に遺言でこの中都への遷都を告げ、来るべき阮福暎との対決に備えさせるように指示したという。<sup>(100)</sup>ゲアンは、阮福暎軍と西山軍双方にとって重要な戦略拠点と目されていたのである。

一七九九年に、阮福暎は上道將軍の阮文瑞、典軍の劉福祥らを萬象國（ラオス）の首都に派遣し、國王に対して援軍の派遣を要請している。山岳民族を中心としたラオス軍を山地からゲアンに下らせ、南方からの自軍と合流させて、西山を挟撃する計画であった。<sup>(101)</sup>約に基づき、一八〇〇年の夏にラオスの國王軍と阮文瑞軍がゲアンから西山軍を目掛けて攻め下りる。<sup>(102)</sup>一八〇一年五月にも阮福暎側につくムオン Muong（山地民）が襲来し、西山の將軍二名を殺害し、ゲアンの一部を占拠する。西山の救援軍到着によりムオンらは素早く退去したが、ムオンの滞在した村落は西山軍によって尽く破壊されたという。<sup>(103)</sup>一八〇一年夏には劉福祥軍とラオス軍が再び山地から攻め下りる。<sup>(104)</sup>それに対し、トンキンから押し寄せる西山側も攻勢に出ることを企図し、平野部で大規模な清又兵士と兵糧の徵発をかけ、ゲアンの民衆は疲弊したとされる。<sup>(105)</sup>

したがって、ドンナイから山岳部經由で押し寄せる阮福暎軍とラオス山岳民族の連合軍に加えて、平野部で散発する反乱の主要な構成員であるキリスト教徒集団が、ゲアンにて反体制勢力として結合する可能性があったこと、一方で兵士、兵糧の伝統的な供給地域として管理を強める必要性があったこと等が、ゲアンにおける西山側のキリ

スト教弾圧の主要な政治的・社会的要因として想定できる。これに仇教官人である阮文慎の思想的要因が加わり、弾圧の主たる推進力となった。

他の地方とは異なり、この時期ゲアンでのみ弾圧が執拗に継続されていたことは従来の当地におけるキリスト教に対する政策からすれば一見、相反する事象に映る。しかし、現地における政策執行の局面において地方長官の影響力が強く反映され、独自の裁量が発揮されるという点で、やはりゲアンの地域特性、すなわちその政治的自立性は維持されている。

歴代の地方長官の保護下で拡大を続けたゲアンのキリスト教勢力であったが、阮福暎側の取り込みが功を奏し始めたこの時期に至り、西山側からは逆に反乱の主勢力であるとの認識を持たれる事となった。北上する阮福暎軍との主戦場となったゲアンにおいて、もはや精鋭兵士の召集も、食糧の供出も、自陣営に取りこむ見込みがなくなることから、阮文慎は自身のかねてからの動機である仇教の名分において、ゲアンにおける弾圧を強化した。

一八〇二年春、シャムが派遣した援軍が到着し、山岳部からゲアンを攻撃したことによって、ついに戦局は動く。ゲアンでの西山勢力は一掃され、六月末には黎文悦と阮文張の部隊が制圧し、翌月、阮福暎の本隊が到着する。阮文慎は主君の阮光纘ら西山一族と一部の廷臣とともに紅河デルタへ遁走し、ゲアンでのキリスト教弾圧はここに漸く終わる。七月、阮福暎は避難先から戻ったラ・モットとラ・ピサシエールに会见し、キリスト教信仰の保護を約した。また、同月、ハノイを攻略した阮福暎はさっそくゲアン・タインホアでの徴兵を行ない、民丁七人に一人の割合で集め、これを自身の精鋭軍である「神策軍」に充て、前代王朝に引き続き、同地における軍事基盤の確立に早速着手している。

### 第三節 阮福暎の勝利

阮福暎は一八〇二年六月にトンキン遠征に先がけて、トンキンの住民と兵士に向けた「平和と西山懲罰に関しての宣言」<sup>(9)</sup>を発した。その後、トンキン全土をほとんど無抵抗で制圧し、七月二十日、ハノイへ到着する。西山による兵糧の強制調達によってトンキンの全土は疲弊し、阮福暎の遠征は容易になったとされる<sup>(10)</sup>。

七月二十九日、ロンジェとエイヨがハノイへ到着した阮福暎を表敬訪問し、歓待を受けている。彼らはこの時、阮福暎に対してキリスト教に好意的な勅令の発布を請願し、近日中の発布が約束された。またこの頃、最後のイエズス会宣教師カルネイロ(Carneiro)が死去し、旧イエズス会系のクレティアンテのMEPへの服従はほぼ完了する<sup>(11)</sup>。阮福暎(嘉隆帝)による公式の認可とイエズス会勢力の消滅は、MEPが西トンキンのキリスト教社会において、公的で正統なキリスト教宣教師として、独占・排他的な立場を確立させたことを意味する。以後、トンキンのMEP宣教師においても、西山はもはや弾圧者、暴君としての記憶が刻まれるのみの存在となった。十一月十日、阮光纘ほか一族と重臣が捕縛され、西山朝はここに幕を閉じた<sup>(12)</sup>。

#### むすびにかえて

トンキンのMEP宣教師にとって、迫害者としての西山像は一七九八年以降、弾圧が短期ではあるが集中的な形態を伴ったことにより、政権末期から阮朝初期にかけて形成されたものである。それに先立つ光中帝の治世、あるいは弾圧がなされない時期において、西山治下のトンキンにおけるキリスト教はかつてない自由を享受した。また西トンキン代牧区では宣教師の全員が阮福暎の到来とその政権を待望していたわけではなかった。

西トンキン代牧区においてロンジェ司教のイニシアティブが発揮され、管区制、ヨーロッパ人宣教師の優越性の確認、個人消費の認可など、組織の集約化をめざした改編が一举に行なわれたのは西山政権下、とくに光中帝治世期の安定した宣教環境においてであった。これにより各管区・小教区の管理を委ねられた宣教師や司祭は相互に監督し合い、信者を督励し、信仰の維持に努めることが可能となった。

また、西トンキン代牧区における主要な宣教地域であるゲアンにおいて、キリスト教をめぐる政権の政策執行は、西山朝においても前代の黎明・鄭氏政権時代の伝統が受け継がれていることを確認した。つまり中央政権の現地での政策執行は地方長官（鎮守・副王）の権限に大きく左右されており、ゲアンの自立性は常に際立っていた。当地におけるキリスト教に対する政策執行の特異性は、軍事的・地理的重要性とも結びついており、北部ベトナムにおけるキリスト教勢力拡大の一要因となった。

今後はゲアン地方におけるキリスト教コミュニティをめぐる政治社会の変動をさらに長期的な視点から分析することにより、一九世紀末に生じたベトナム近代史上の重大事件である、反フランス・反キリスト教の一連の反乱（「教案」と「勤王運動」）が何故にこの地で激化し、儒者・キリスト者双方の抗争が頂点に至ったのか、そのメカニズムを解明したい。

注

(1) 一八〇二～一九四五年。

(2) 一七八八～一八〇二年。阮惠の光中帝としての即位をもって西山朝創始年とした。

(3) 代表的な研究として、MAYBON Charles, *Histoire moderne du pays d'Annam 1592-1820*, Paris, 1920. が挙げられる。近年の研究動向を知るには、嶋尾稔「タイソン朝の成立」、『岩波講座東南アジア史第四巻 東南アジア近世国家群の展開』、岩波書店、二〇〇一年)が詳しい。

(4) パリ外国宣教会はその略称として、現代においても各種出版物などにおいて自ら「MEP」を用いており、本稿ではこの用法に倣った。

(5) 代牧 *Vicaire Apostolique* については『キリスト教辞典』(岩波書店、二〇〇二年)には以下の説明がなされる。「元来教皇特使の資格で、教皇の代理としての特権を持つ役務であったが、一七世紀以後、教区司牧の裁治権が十分に浸透しなかつたキリスト教地域または、布教保護権を持つキリスト教諸国が、教会に十分保護を与えなかつた地域(インドや中国)に代牧区 *vicariatus* を設置し、その教会責任者を代牧として教皇庁より任命した。代牧は通常、各教区の司教とは同等の権能を与えられ、教皇庁の布教聖省の管轄におかれた。(川村信三)」。わが国におけるベトナム史研究においては、坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史』(東京大学出版会、一九九一年)において、上記の訳語があてられており、本稿もこの用法に従う。

また、本稿が分析対象とする西トンキン代牧区

*Vicariat du Tonkin Occidental* は一六七九年の設置以来、一八四六年にゲアン *Nghe An*、ハティン *Ha Tinh* 地方を教区とする南トンキン代牧区が分立するまで、北部ベトナムにおける MEP 唯一の代牧区であった(红河を境界として東側は「東トンキン代牧区」としてスペインのドミニコ会が布教を担当した)。教会史料を主要な依拠資料としている本研究において、「トンキン」は、特にことわりのない限り、北部は红河デルタ地域の西半分から山岳地方に至るまで、南部はゲアン・ハティン両地方を含んだ地域の総称であり、仏領期から始まる地域行政区分である「トンキン」とは地理的に相違のあることを予めご了承ください。

(6) MAYBON, *op. cit.*, p. 143.

(7) L'UNAY Adrien, *Histoire générale de la Société des Missions Étrangères II*, Paris, 1894, *Histoire de la Mission de Cochinchine 1658-1823, 1923-1925*, Paris, *Les Missions Françaises au Tonkin*, Paris, 1900.

(8) PHAN Phat Huôn, *Viêt Nam Giao Su 1533-1933*, Saigon, 1965.

(9) たとえばファンの前掲書の中でトンキンに割かれた項目はコーチシナの四分の一弱程度にすぎない。ローネイ前掲書 (*Histoire de la générale...*) においてもほぼ同様の配分である。

- (10) 代表的な研究として FOREST Alain, *Les Missions natures Françaises au Tonkin et au Siam XVIIIe-XVIIIe Siècles Analyse comparee d'un relatif succès et d'un total échec. Livre I. II. III.* Harmattan, Paris, 1998, RAMSAY Jacob, *Extortion and Exploitation in the Nguyen Campaign against Catholicism in 1830s-1840s Vietnam*, 314 p., *Journal of SOUTHEAST ASIAN STUDIES*, vol. 35, 2004. 等が挙げられる。
- (11) パリ外国宣教会文書館文書 (Archives des Missions Etrangères de Paris)。<sup>6)</sup> 本稿では AME と略す。『暹羅』(Folio) 雑記の順に記載される。
- (12) 一七〇七年におおむ十分鐘をねづらぬいひが知られる。(FOREST, *op. cit.*, III, p. 120.) その後、時代が下るにつれて管区は増大する。
- (13) 一六八三年にサラマンテ Sarrante がゲマンのチャン・デン Tran den に派遣された。当地にローミングを設置したので、嚆矢となる。FOREST, *ibid.*, II, pp. 157-160.
- (14) 桜井由躬雄『ベトナム村落の形成』創文社、一九八七年、二二五—二六六頁。
- (15) AME 710 folio 24. 1.
- (16) *Annales de la Propagation de la Foi* (以下 APF と略) Tome 3, p. 461., FOREST, *op. cit.*, III, pp. 92-93.
- (17) AME 697 fo 982. 宣教師ラングロ Langlois のちね、他の地方では商人は兼業をするよりは稀で、一年中、舟の上で食料品を売りまわるといった。
- (18) 清久優兵衛についての主な研究としては、藤原利一郎「黎末史の一考察—鄭氏治下の政情について」(『東南アジア史の研究』、法蔵館、一九八六年)、『八尾隆生「ベトナム黎明初期の清化集団について」(『東洋史研究』四六一四、一九八八年)、『Dang Phuong Nghi, *Les institutions publiques du Viêt-Nam au XVIIIe siècle*, École Française d'Extrême-Orient, Paris, 1969, pp. 122-130. などがある。
- (19) FOREST, *op. cit.* III, p. 353.
- (20) FOREST, *op. cit.*, II, p. 38.
- (21) FOREST, *op. cit.*, III, pp. 149-150, pp. 183-184, p. 343.
- (22) FOREST, *op. cit.*, II, pp. 125-126.
- (23) FOREST, *op. cit.*, III, p. 341.
- (24) FOREST, *op. cit.* II, p. 184.
- (25) FOREST, *op. cit.* II, pp. 96-99, pp. 199-200.
- (26) AME 700 fo 771.
- (27) AME 700 fo 880., 903-906., 950-951., 966.
- (28) AME 700 fo 1018-1020. FOREST, *op. cit.* II, p. 218.

- (29) AME 700 fo 1007. FOREST, *op. cit.* II, p. 217.
- (30) AME 700 fo 1016-1017. FOREST, *op. cit.* II, p. 339.
- (31) 一七八二年にフランスを出発し、ベトナム到着後は西トンキン代牧区で宣教活動を続けた。一七八九年に総代理に任命され、一七九六年ケーヴィンにおいてロンドン代牧司教の聖別をうけ、協働司教に叙任された。
- (32) AME 700 fo 1399.
- (33) AME 692 fo 645-646.
- (34) 一七八五年三月十二日にフランスを出発し、翌年、布教先のコーチシナに到着してゐる。
- (35) AME 298 fo 609. 六月にこの夫人は病死する。光中帝自身も悲嘆のあまりに死亡したという風聞が広がり、実際にその後まもなくの翌年、一七九二年九月十六日に死去してゐる (AME 700 fo 1450, AME 700 fo 1468, AME 692 fo 397-398.)
- (36) AME 700 fo 1469-1470.
- (37) リーヴルはおよそ五百グラムに相当するので、五トン相当と換算される。
- (38) AME 692 fo 399, AME 692 fo 412, AME 313 fo 981-982, MANGUIN Pierre-yves, *Les Nguyen, Macau et le Portugal, aspects politiques et commerciaux d'une relation privilégiée en Mer en Chine 1773-1802*, Paris, 1984, p. 98.
- (39) AME 298 fo 698.
- (40) AME 700 fo 1508-1509.
- (41) AME 700 fo 1398-1399. 一七九七年にならなくても同様の疑問がラングロワによつて付されてゐる (AME 692 fo 855-856.)
- (42) ヌトナム語で Chua は王、Vua は皇帝を指す。黎朝時代において Chua は廣南阮氏とトンキンの鄭氏のことであり、Vua は黎朝皇帝を指し、両者は区別された。
- (43) AME 692 fo 217.
- (44) AME 701 fo 512.
- (45) AME 692 fo 454.
- (46) AME 692 fo 217, AME 700 fo 1399.
- (47) FOREST, *op. cit.* II, p. 251. この若者はかつて代牧区内で扶養されてゐた聖職者見習ひの一学生であつた。
- (48) AME 701 fo 909. マカオで派遣先がコーチシナへ変更され、一七七七年に到着。
- (49) 代牧司教への任命申請は一七八五年に出され、一七八七年春には発送されたが、戦乱により到着が遅れた。APF 16, p. 14, AME 701 fo 916.
- (50) 光中帝の死から二週間後の出来事であつた。
- (51) コーチシナ代牧区へ派遣。
- (52) APF 16, p. 17, p. 36.

- (53) たとえば一七六五年五月、代牧司教を除いて宣教師は二名しかおらず、その監督下で二九名の現地人司祭が九万人の信者が散らばる各教区を担当した (AME 690 fo. 462-463.)
- (54) AME 692 fo. 441.
- (55) APF 16, p. 18.
- (56) AME 700 fo. 1509.
- (57) AME 692 fo. 546.
- (58) APF 16, pp. 19-20.
- (59) AME 692 fo. 541. 『大南正編列傳初集』(慶応義塾大学言語文化研究所発行)、卷三十、44 b. には「又安大司寇武文勇」の名がみられる。武文勇は一七九五年の裴德宣による禁教令に「反発し、左遷を受けており(後掲注(63))、キリスト教勢力のシンパであった。
- (60) AME 602 fo. 510-512.
- (61) AME 692 fo. 564, fo. 569-570.
- (62) AME 692 fo. 622.
- (63) やはりフランス語原文には副王 Vice Roi と表記されるのみであり、具体的な官職は不明である。ただし、『大南正編列傳初集』卷三十、44 b. には「大司馬吳文楚」とみえ、また同箇所には「是年冬得宣使吳文楚代武文勇調撥北城軍事」とある(注:「是年」は甲寅年であり、一七九四年)。したがって红河デルタを中心とした北城(北部ベトナム)の軍事行政権を掌る官職

- であったことが推察できる。
- (64) AME 701 fo. 96-103.
- (65) AME 692 fo. 656.
- (66) AME 692 fo. 663.
- (67) AME 692 fo. 622.
- (68) AME 692 fo. 705-706.
- (69) AME 701 fo. 132-133.
- (70) AME 692 fo. 888-889.
- (71) 前掲注(63)を参照。
- (72) AME 692 fo. 636-638.
- (73) APF 16, p. 23.
- (74) 「神の家」については拙稿、「パリ外国宣教会西トンキン代牧区における「神の家 (Maison de Dieu)」 『アジア地域文化研究』第一号、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究科・教養学部アジア地域文化研究会、二〇〇五年を参照。
- (75) AME 692 fo. 762. 一八一一年のテシエ Tessier の報告では「一年半前から、七千人の信者を擁するある小教区の長として司祭の任にあるが、ヨーロッパ人宣教師が小教区の長となるのは我々の慣習ではない。教区付司祭をとめるのは現地人の司祭であり、我々は司祭と彼等の信者を訪問するのだ」と述べている (Letres Edifiantes Tome 8, p. 295)。
- (76) AME 693 fo. 321.

- (77) AME 701 fo 176.  
 (78) じやうごころじやう参の司教臨のあやサラーノ Séraud  
 中「共有精神が失われかねたら」に批判的見解を示す  
 (AME 692 fo 783-784.)<sup>o</sup>
- (79) AME 690 fo 463.  
 (80) AME 692 fo 747.  
 (81) AME 692 fo 763.  
 (82) AME 692 fo 766.  
 (83) AME 692 fo 767.  
 (84) AME 692 fo 826.  
 (85) AME 692 fo 855-856.  
 (86) AME 692 fo 850-851.  
 (87) AME 692 fo 859-860.  
 (88) AME 693 fo 29-31, AME 701 fo 292, MAYBON,  
*op. cit.*, pp. 322-323.
- (89) 原文に *magicien* ヲ用ス<sup>o</sup>  
 (90) AME 693 fo 29-30.  
 (91) AME 701 fo 314-315.  
 (92) MAYBON, *op. cit.*, p. 323.  
 (93) AME 693 fo 45-54, fo 87, fo 99, LAUNAY, *op.*  
*cit.*, II, 1894, p. 325.  
 (94) AME 701 fo 301-302.  
 (95) AME 693 fo 121, *Lettres Edifiantes* t8, pp. 14-  
 23.

- (96) *Lettres Edifiantes* t8, p. 66  
 (97) AME 701 fo 512.  
 (98) AME 693 fo 622-623, fo 632-634, AME 701 fo  
 511-512.  
 (99) 『大南定録正編』(慶應義塾大学言語文化研究所発行)  
 第一紀巻四<sup>o</sup> 20<sup>o</sup>.  
 (100) FOREST, *op. cit.*, II, p. 121, AME 693 fo 508,  
 MAYBON, *op. cit.*, p. 313.  
 (101) 『大南定録正編』第一紀巻十一<sup>o</sup> 70-80<sup>o</sup> 『大  
 南定録正編』第一紀巻十一<sup>o</sup> 90<sup>o</sup>.  
 (102) 『大南定録正編』第一紀巻十一<sup>o</sup> 220-240<sup>o</sup>.  
 (103) AME 693 fo 548.  
 (104) 『大南定録正編』第一紀巻十五<sup>o</sup> 100-200<sup>o</sup>.  
 (105) AME 693 fo 632-633, AME 701 fo 513, 『大南  
 定録正編』第一紀巻十一<sup>o</sup> 23<sup>o</sup>. MAYBON, *op. cit.*,  
 p. 344, *Lettres Edifiantes* t8 pp. 84-85.  
 (106) 『大南定録正編』第一紀巻十六<sup>o</sup> 01<sup>o</sup>.  
 (107) MAYBON, *op. cit.*, p. 346, *Lettres Edifiantes*  
 t8, p. 87.  
 (108) 『大南定録正編』第一紀巻十六<sup>o</sup> 74<sup>o</sup>.  
 (109) MAYBON, *op. cit.*, p. 345.  
 (110) AME 693 fo 633, MAYBON, *op. cit.*, p. 345.  
 (111) AME 693 fo 594-595, fo 603, fo 615-619, fo 703,  
 fo 919, AME 701 fo 503-504.

(註) LANGLET Philippe, *L'Ancienne histogiographie d'État au Vietnam Tome I, Raisons d'être, conditions d'élaboration et caractères au siècle des Ngu-yên.*, Paris, 1990, p. 18.

# The Vicariat of Western Tonkin of La Societe des Missions Etrangeres de Paris under the Tayson dynasty 1788–1802

MAKINO Motonori

Key words: Christianity, La Societe des Missions Etrangeres de Paris, Tayson, Nghe An, Tonkin

This article focuses on the socio-political situation of the Christian community in North Vietnam (Tonkin) during the Tayson dynasty of 1788–1802. The main source used is a collection of manuscript letters written by French Missionaries of the Societe des Missions Etrangeres de Paris (MEP) who administered the Vicariat of Western Tonkin from the XVIIth to the XXth centuries.

In previous research the image of the Tayson dynasty as a “persecutor” of Christianity has been amplified by emphasizing the “legitimacy” of Nguyen Phuoc Anh (阮福瑛), the founder of the Nguyen dynasty which lasted from 1802–1945, and by uncritical and repetitive citation of secondary sources.

New material from the archives of MEP shows however that it was during the reign of Tayson Emperor Quang Trung (光中帝) that the liberty of Christianity was assured more firmly than ever in Tonkin. Many clerical systems were introduced to the Vicariat of Western Tonkin under the direction of Bishop Longer, and furthermore there were always several high ranking mandarin officers of the Tayson government who protected the Missionaries and Christians, especially in the province of Nghe An.

The Tayson era was a particularly formative period of the Christian community in North Vietnam as it developed under and endured suppression in the XIXth century.